

第20号

2023年
9月発行

CONTENTS

「国書データベース」の挑戦

研究部 准教授
国書データベース総括責任者

松田 訓典 ①～③

ハーバード大学での国際カンファレンス
「Tools of the Trade」参加記

研究部 特任准教授

菊池 信彦 ④～⑤

現代の情報基盤とその必要性

…研究DXと研究公正のためのデー
タマネージメント国立情報学研究所コンテンツ科学研究系 准教授
オープンサイエンス基盤研究センター 副センター長

込山 悠介 ⑥～⑦

「稿本」の古典と近代

—国文学研究資料館 自筆資料画像
公開プロジェクト

研究部 准教授

多田 蔵人 ⑧～⑨

事業移行評価について(報告)

古典籍共同研究事業センター

⑩

こんな古典籍があった!

—拠点大学等古典籍画像紹介—

⑪

トピックス

⑫

ふみ

「日本語の歴史的典籍の
国際共同研究ネットワーク
構築計画」ニューズレター大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国文学研究資料館
古典籍共同研究事業センター

「国書データベース」の挑戦

二〇一四年に開始された歴史的典籍NW事業はついに十年の計画の最終年度を迎え、本事業における最も大きな目標の一つであった三十万点におよぶ古典籍画像のデジタル化とその公開もおおよそ予定通り完了できる見込みとなっています。すでにご承知の通り、それら画像は二〇一七年度に「新日本古典籍総合データベース」(新古典籍DB)として公開が開



図1 国書データベース

始され、昨年度末に「国書データベース」(<https://kokusho.nijl.ac.jp/>、国書DB)として生まれ変わりました。本稿ではその概要について改めて紹介していきたいと思います。

研究部 准教授
国書データベース総括責任者
松田 訓典

まつだ

くのにのり

その背景を理解しやすくするために、まず当館の日本古典籍に関するデータベースの歴史を振り返っておきましょう。古典籍を扱う方々にとって最も基本的な目録として、『国書総目録』(全八巻、岩波書店、一九六三～一九七六)があります。この目録は第二次大戦で途絶してしまった『岩波国書解題』の編纂という企画を受け継ぎながら、戦中・戦後の混乱などもある程度相当数の再調査を加えた上で、延べ二十五年の歳月と百七十万枚の調査カードをもって刊行にいたった、およそ五十万項目を擁する一大成果物となっています。本目録は「国初から慶応三年(江戸時代末(筆者補記))までの間に、日本人が著作し、編集し、あるいは翻訳した書籍を採録」することを「最初

の目標」としつつ、「全国図書館文庫の総合目録の作製」を「基本的意図」としていたと述べられています。(文献〔一〕ii~iii頁)現在広く利用されているのは、一九八九〜一九九一年に発行された補訂版ですが、その目録および意図を受け継ぎ、さらなる発展を目指して構築されたのが当館の「日本古典籍総合目録データベース」(目録DB)でした。

「目録DB」は以降『国書総目録』以外にも多くの江戸時代以前の日本の書籍(一部例外あり)の著作・著者データを収録していきましたが、一方で、前述の「基本的意図」を踏まえ、多くの機関の協力のもと、古典籍の書誌・所在情報を蓄積し続けたことに特徴があります。またデータベースの作成に当たっては図2のような構造がとられています。ここで、当館のデータベースの利用に際して著作・著者・書誌という三つのキーワードが出てきます。著者はさておき、著作・書誌という分類は国文学研究者にとってもあまり馴染みのないことも多いようですが、「著作」はいわゆる作品のことであり、「書誌」は個別資料にあたります。具体例は図にある通りですが、このような整理の仕方は、同一の作品であっても個別資料によって書名などの表記の揺れが大きいことや、個別資料の研究上の意義が大きいことといった古典籍の事情が要因となっているようです。ただし、書誌採録のデータベースの相違や歴史的経緯により、著作に紐づいていない書誌、逆に書誌に紐づいていない著作という場合もあります。いずれにしても当館ではこれらのそれぞれに識別子を付し、特に著作・著者に関しては典拠デー

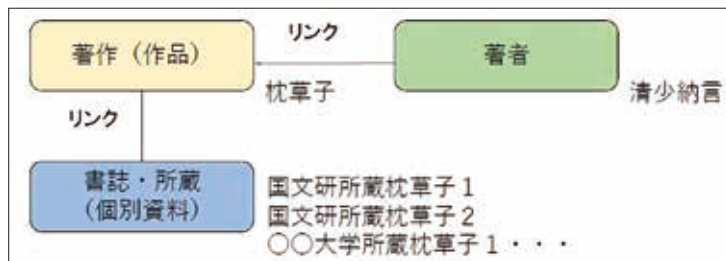


図2 著作・著者・書誌の関係(文献〔三〕三頁より抜粋)

タとして国会図書館によるWeb NDL Authoritiesとの連携なども行っています。このあたりの事情に関しては文献〔二〕の前半でまとめられておりますので、当館の書誌作成の状況も併せて理解いただけるのではないかと思います。

一方、「新古典籍DB」は、本事業において目標とされた三十万点の古典籍画像を公開するためのプラットフォームとして構築されました。その名称の「目録DB」との類似性にもかかわらず、コンセプトとしてはいかに古典籍画像を広く利用していただくか、ということの基本としていたため、「著作」ではなく、あくまで実際に画像化される個別資料、つまり「書誌」のみがその対象となっており、ました。そのため、前述の通り著作のみにしかない作品に関しては対象外であり、「目録DB」とは相互補完的に利用されることが想定されていました。また、可能な限りオープンなデータとして利用者や他のシステムからも利用できるよう、IIIFをはじめとしたいくつかのデータ流通の枠組みを先進的に採用したり、有益なコンテンツの発見の助けとなるように、全体からするとごく一部ではありますが、個々の画像へのアノテーション(画像タグ)の付与や、全文テキストによる検索などの機能も試験的に提供していました。

以上二つのデータベースが統合されて生まれたのが「国書DB」です。具体的な検索方法や使い方はマニュアル(文献〔三〕)に譲るとして、従来「目録DB」がもっていた役割と、著作・著者・書誌の検索機能を継承しながら、「新古典籍DB」で提供していた画像提供機能、アノテーション(画像タグ)や全文テキストの検索機能を取り込んでいる、まさに統合版となっています。(図3、図4「新古典籍DB」を主にご利用いただいていた方にとっては、著作検索がデフォルトになっている点で幾分使用感が異なっているかもしれません。機能的にはほぼ同等のことを実現しています。

「国書DB」になって二つのサイトを使い分ける必要がなくなり、システムの安定性や検索・表示速度もかなり改善されていますが、最も大きな改善点は実は目に見えない部分にあります。これまでは両DBともに一部プロプライエタリな（オープンでない）ソフトウェアが使われており、またソフトウェア全体に関しても包括的な保守契約のもと運用されていました。もちろんそれらにはそれらの利点があったわけですが、一面では不具合修正や新機能の実装に当たって、たいへんな困難に直面してしまうことがたびたびありました。それに対して「国書DB」ではオープンソフトウェアを最大限活用した実装を行い、館内で柔軟な運用を可能とする体制をもてるように舵が切られました。現在も担当係を中心に日々改善に向けて動いています。こうした基盤の上に立って、すでに「ふみ」でもたびたび紹介されている後継計画「データ駆動による課題解決型人文学の創成」の進捗にに応じて、ともに柔軟に成長していきたいと考えています。



図3 上段：タグ検索例「烏帽子」
下段：全文検索例「善悪」



図4 画像・テキスト・書誌情報の例
<https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/1003775772/>

【参考文献】

- 〔一〕『補訂版 国書総目録』第一巻、岩波書店、一九八九。
<https://kokusho.nijl.ac.jp/page/kokusho.html>
PDF <https://doi.org/10.20730/isbn.9784000086011>
(参照 2023-07-19)
- 〔二〕飯沼邦恵【講義11】日本古典籍総合目録データベース・新日本古典籍総合データベース概要「日本古典籍講習会テキスト2010」一四十二頁、二〇一〇。
PDF <https://kokubunken.repo.nii.ac.jp/records/4662>
(参照 2023-07-19)
- 〔三〕「国書データベースマニュアル」1.1版。
<https://kokusho.nijl.ac.jp/page/guide.html>
PDF <https://kokusho.nijl.ac.jp/page/manualv1-1.pdf>
(参照 2023-07-19)

ハーバード大学での国際カンファレンス“Tools of the Trade”参加記

研究部 特任准教授 菊池 信彦
きくち のぶひこ

はじめに

二〇二三年三月十四日から十六日まで、アメリカ合衆国ボストンにあるハーバード大学において“Tools of the Trade: The Way Forward”¹と題する国際カンファレンスが開催された。カンファレンスでは東アジア研究デジタルヒューマニティーズ(DH)の研究者らが、その各々の「商売道具(Tools of the Trade)」すなわちデジタルツールをテーマに報告を行い、コロナパンデミックから抜けつつあるなかで久しぶりの対面でのコミュニケーションを楽しんだ。カンファレンスは、東アジア学会(Association for Asian Studies)年次大会に合わせて開催されたことで、様々な国や地域から東アジア研究者とDH研究者、そしてライブラリアン等千人以上が集まる大規模なものとなった。この小稿では、筆者も報告参加したこのカンファレンスについて紹介したい。

カンファレンスの概要

Tools of the Tradeの会期三日間は、中国、台湾、韓国、日本、ベトナムという言語・国別、それに仏教研究を加えた六つを縦軸に、「図書館」や「研究機関」「辞書」といった共通テーマが横軸として設定され、各日朝一番に共通テーマのもとで合同セッションが開催され、その後それぞれの国・言語別に分かれてテーマに関連した

ワークショップやプロジェクト報告が行われた。(このあたり文字では説明しづらいところなので、Tools of the Tradeのウェブサイトに掲載されているプログラムをご覧ください。)DHという共通の土台があるとはいえ、多言語かつ多文化な東アジア地域を上手くまとめたプログラムだと感じられた。

筆者は、日本関係のセッションを中心に参加していたので、他の国や地域に関する報告を聞く機会は多くはなかったが、プログラムに表れているように、中国からの報告、あるいは、中国に関する報告が多くを占めていたことから、東アジアDHにおける中国の存在感の大きさ、ひいては日本のシェアの相対的な「小ささ」というものを実感する機会となった。日本からは、当館以外にも、国立国会図書館、ROIS-IDS人文学オープンデータ共同利用センター(CODH)、国立国語研究所、国立歴史民俗博物館、人文情報学研究所、東京大学等から参加があり、それぞれの取り組みについて報告がなされたほか、海外の日本研究者らによるDHプロジェクトの発表も複数あった。

筆者の報告

筆者は、会期二日目の研究機関セッションで報告を行った。このセッションは、各国の研究機関のDHの取り組みについて全体

¹ Tools of the Trade: The Way Forward. <https://sites.harvard.edu/tools-of-the-trade/>

セッションがあり、その後国別に分かれて報告が行われたものである。全体セッションにはCODHの北本朝展教授が日本を代表する機関として登壇し、続く個別セッションでは、北本教授のほか、人文情報学研究所の永崎研宣主任研究員、そして筆者の三名が登壇した。

筆者は、当館が過去十年間をかけて構築を進めてきた「新日本古典籍総合データベース」改め「国書データベース」の成果を踏まえ、これから進めようとしている「データ駆動による課題解決型人文学の創生」プロジェクトについて紹介を行った。すなわち、国書データベース搭載の古典籍デジタル画像から、テキストデータおよびそれを基にした構造化データの公開を担う「デー



個別セッションの様子

タイムプラスストラクチャの設計と構築」研究や、そのデータインフラストラクチャの人文系ビッグデータの解析とその解析技術そのものの開発を行う「人文系データ分析技術の開発」研究、そして、物質としての書物が蓄積してきた素材情報の分析とデータの蓄積を行う「マテリアル分析・解析」研究等を取り上げた。なお、筆者を含め、カンファレンスの発表資料は、「Tools of the Trade」のウェブサイト²で公開されているので、興味のある方はぜひご覧いただきたい。

おわりに代えて

改めてカンファレンスを振り返ってみると、もはやデータ公開を積極的に行うのは当然のことであって、さらにその上に、どのような使いやすい分析環境やツール等を積み上げていくかが、とりわけ海外の日本研究者あるいは日本研究司書からは強く求められていると感じられた。一研究者としては、デジタルツールや研究環境が人文学としての分析や考察を左右することを懸念しつつも、デジタルツールや環境の不振が人文学そのものの存続を左右しかねない現状もまた憂慮せねばならない。そのため、データインフラストラクチャの構築とともに、そのデータを使った新たなツール開発に積極的にありたいと意を強くした。カンファレンスは、筆者にとってそのような感想を抱かせる機会となった。

² Tools of the Trade: The Way Forward. <https://fccs-dei.github.io/tot-projects/>

● 研究D Xと研究公正のためのデータマネージメント

込山 悠介

図1 研究データ基盤NII Research Data Cloud

れぞれ、管理基盤(GakuNin RDM)は、研究者が自身で研究中の公開前のデータを保存管理し、共同研究者とデータ共有を行う事ができるサービスである。学術機関の認証のフェデレーション(連合)を学認といい管理基盤の由来である。公開基盤(JAIRO Cloud)は、研究者自身あるいは、図書館職員や専門分野のキュレータが協働して、インターネット上へ研究データを公開するためのサービスである。検索基盤(Cinii Research)は、国内の学術論文、書籍、博士論文、紀要、研究者、研究課題そして研究データを統合的に検索できるサービスである。本稿では特に、管理基盤を取り上げて紹介する。

研究データ管理(リサーチデータマネージメント)とは、研究者が研究活動を実施するなかで日々、生成されるデータを適切に構造化して、組織的な管理を行う行為・業務を指す。研究データにメタデータを付与して保存・管理することで、論文のエビデンス(根拠)データとして長期的に残す事ができる。研究データ管理は、共同研究者間で未発表の論文や研究データを共有しながら、分析作業を進めるなど研究推進にも寄与する。また、所属機関は所属研究者のデータ管理を推進することで、組織のデータガバナンスを強化することができ、研究不正の防止効果や、不正発覚の際の証跡調

査などへの利用が、研究公正の観点で期待される。

このような学術研究における研究データ管理を支援するために、NIIでは管理基盤のサービスを提供しており、二〇二三年の執筆時点で全国七五の学術機関が導入している。管理基盤は図2の様な研究プロジェクトの管理画面を持つクラウドサービスであり、インターネットがあればいつでもどこでもウェブブラウザから利用できる。ログインには、学認に参加している所属機関の認証システムのアカウントとパスワードでアクセスする。利用対象は研究者を中心に、研究に関わる学生や研究支援者が利用することができる。システム中で利用者は個人または共同研究者と研究データ管理や共有をするための、研究プロジェクト毎の保存領域を作成することができ、その中で研究データ管理ができる。ソフトウェアの外観はストレージサービスに類似、パソコンのデスクトップ上にあるファイルをドラッグ・アンド・ドロップすることで、簡単に研究データのファイルをアップロードすることができる。管理基盤中に保存されたデータには証跡管理機能が作動し、ある時間に確かにデータが存在したことを証明す



図2 GakuNin RDMの研究プロジェクト管理ポータル画面

る。データの来歴管理機能により、プロジェクトメンバーの誰がファイルを作成・編集・移動・削除等の操作をしたかが克明に記録されるため、研究プロジェクトの管理者は有事の際にログを取得して調査する事ができる。

システム中に保存したデータに対して、内閣府が提示する「公的資金による研究データの管理・利活用に関する基本的な考え方」で定義されているメタデータが登録できる。この機能はプロジェクト中のファイルやディレクトリに対してメタデータ付与する。資金配分機関に提出するために、データセットを表形式で出力する。国内ではムーンショット型研究開発制度の採択課題において、研究成果データについて管理対象データとそのメタデータの登録が先行して義務化されている。データ共有や公開を通常より早期に行うことで、ムーンショットの^{ひびき}弩級の研究目標に向けた研究促進が行われている。

今後の展望として、文部科学省のAI等の活用を推進する研究データエコシステム構築事業を通じて、NII RDCの各基盤間やその他サービスともシステム連携の機能強化が計画されている。管理基盤は公開基盤と連携することで、研究データの公開を研究者自身が迅速に実行できるようになる。管理基盤は、システム中にデータ分析用の解析機能も備えており、今後更に研究データ、プログラムなどデータサイエンスにおける分析手法の再現性の向上を目指している。その他、データガバナンスのための機能の拡張も進めており、データ管理計画や研究データポリシーにも対応した統合システムを実現することで、継続的にオープンサイエンスや研究DXを支援していく。

「稿本」の古典と近代

——国文学研究資料館・自筆資料画像公開プロジェクト

研究部 准教授 多田 蔵人
ただ くらひと

当館では令和三年度より、近代文学の「手稿資料」に関する研究

事業の一環として、文学者の手稿資料をデジタル画像化し「近代書誌・近代画像データベース」(「国書データベース」に統合予定)にて公開するプロジェクトを、各地の文学館や図書館と協力して行っている。令和四年度にはかごしま近代文学館・メルヘン館所蔵の「島尾敏雄特別資料」、笠岡市教育委員会管理「森田思軒自筆原稿」コレクション、中原中也記念館所蔵「中原中也自筆コレクション」を公開した。令和五年度にも、複数の機関と連携しつつ公開準備を進めている。

近年の近代文学研究では、フランスにおける「生成批評(Critique Genetique)」の影響を受け、手稿資料に注目が集まっている。推敲過程から作者の構想の変化をたどったり、紙や筆記具の使い方などを通じて作者たちの執筆環境を探ったりする研究だ。ただし現在のところはまだ本格的な研究がはじまったばかりであり、かつ、若い世代の学生や研究者が実見できる手稿資料の数は限られているという課題がある。資料に関する文献学的な知見は、一定以上の数を見た方が得やすいことは従来の書誌学が示してきた通り。手稿資料のさらなる研究上の可能性を引き出すためにも、誰もがアクセスできる手稿資料の数と種類を増やしてゆけたらと考え

ている。

このプロジェクトのもう一つの目的は、近代文学と近世以前の文学との接点を新しく見いだすことにある。原稿用紙に筆で書かれたり無罫の和紙に鉛筆で書かれたりしている近代の手稿資料は、板本から活字本へと変化していった刊本資料と同じくらいか、あるいはそれ以上に、近世と近代との接続面に関する興味深い知見をあたえてくれるのである。

「国書データベース」の検索画面でキーワード「稿本」を入力し、ヒットする資料画像を見ていくと、稿本の書きかたやその根本にある板本と稿本との関係の考えかたが、ジャンル毎に微妙に異なるらしいことが見えてくる。たとえば漢詩文の稿本は知友に批を乞うことが多く、稿本に書かれた具体的な評語が刊本に残ることもある。文人間の交遊を刊本に残すジャンルといってもよいが、一方和歌・和文や俳諧などでは、宗匠などの評語は残さない場合が多いようだ。板本の登場以降の稿本には、こうした「共作」関係の違いによる訂正の違いのほかにも、知識の正しさを志向する「校訂」、それから全体の編成のために見出しなどを整える訂正などなどがある。あつて、「推敲」のめざすものが表現の彫琢ばかりではなかったことを教えてくれる。

「草稿」「原稿」「手稿」などの用語で呼ばれる近代の自筆資料には、こうした近世以前における「稿本」のヴァリエーションを踏まえなければわからないことも多い。たとえば短歌雑誌「明星」の若手歌人だった高村光太郎は、歌を何度投稿しても「与謝野先生」に徹底的に添削された形でしか雑誌に載らなかったと、不満げに回想している（「美術学校時代」）。実際、与謝野晶子は多いときで四日ほどを「明星」投稿歌の添削に費やしたらしい（明治四十年三月二十二日、馬場孤蝶宛与謝野鉄幹書簡）。しかし和歌の稿本における宗匠の位置を考えればこれは当然といってもよい事態だったわけではじめから添削を前提として歌を投稿する歌人がいた可能性もあるだろう。そもそも晶子その人が河井醉茗や与謝野鉄幹の添削によって自らの歌を磨いた歌人でもあったのであり、生粋の東京っ子である光太郎の違和感から、彼の表現意識の時代性や地域性を取りだすこともできるだろう。短歌ではなく小説の草稿だが、師匠である尾崎紅葉の添削をある程度先取りしつつ、したたかに自分の表現を鍛えていたらしい、初期の泉鏡花のような原稿も残っている。手稿で決定された文言が、文学者の予期した「最終形」とは限らないわけである。

おそらく近世よりもっと古く、中世あたりから、各時代の「稿本」をつないでゆくことで得られる知見は多いのではないかと思う。——この時代の研究では他人の合点・添削を受ける前の詠草とその後の段階、どちらを重視するのでしょうか。中原中也の原稿ではこんな風に考えられています——。ひと昔前には到底ありえなかったそんな研究上の対話から、新しい（日本語文学）の歴史がひらかれる、そんな場面を夢みているところである。



「中原中也「（とにもかくにも春である）（草稿3）」。中原中也記念館蔵、昭和8年4月25日成立（推定）。安原喜弘宛の書簡に同封された、書簡の一部でもあり詩の草稿でもある資料。当該資料については中原豊氏のご教示を得た。
<https://school.nijl.ac.jp/kindai/NCMM/NCMM-00006.html#1>

事業移行評価について（報告）

古典籍共同研究事業センター

「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」（以下「現行計画」）は、文部科学省「大規模学術フロンティア促進事業」のプロジェクトの一つであり、その後継となるプロジェクトとして「データ駆動による課題解決型人文学の創成」（以下「後継計画」）がロードマップ二〇二〇に策定されています。現行計画の実施期間は、平成二十六年度から令和五年度までの十九年であり、この令和五年度は年次計画の最終年度に当たるのです。

「大規模学術フロンティア促進事業」においては、後継計画への移行の可否を審議するため、科学技術・学術審議会 学術分科会 研究環境基盤部会 学術研究の大型プロジェクトに関する作業部会（以下、「作業部会」という。）により、「事業移行評価」（現行計画に対する期末評価と後継計画に対する事前評価を代替）が行われることとなりました。

令和五年五月三十日、作業部会による現地調査及びヒアリングが、国文研において実施されました。

現地調査では、山本和明センター長から、現行計画で新たに取入れた画像データ作成の「内製」、新日本古典籍総合データベースと日本古典籍総合目録データベースとを発展的に統合し本年三月に公開した「国書データベース」、高精細デジタルマイクロスコップを用いて歴史的典籍を分析する「マテリアル分析」の研究事例などの説明が行われ、続いて、国文研が所蔵する貴重な歴史的典籍の展覧も行われました。

ヒアリングでは、実施主体からの説明として、渡部泰明館長によるプレゼンテーションが行われ、その後、作業部会委員と実施主体との質疑応答・意見交換が活発に行われました。

令和五年七月三十一日、作業部会による事業移行評価結果が公表され、プロジェクトの達成状況を踏まえた評価として、「現行計画は、当初の目標を達成しており、約30万点の古典籍データベースを整備・公開したことにより（中略）人文学の間口を広げた意義が

認められる。速やかに後継計画へ移行することで、本データベースを一層充実させることにより、より広い分野でのデータ駆動型の研究展開が図られ、予想を超えた成果が創出されることが期待できる。」との評価を受けました^{注1}。

このような評価を受けることができたのは、ひとえに関係の皆様のご支援とご協力の賜物と深く感謝しております。国文研では、現行計画の成果をさらに発展させ、後継計画へ移行するべく、準備を進めております。引き続き、関係の皆様のご支援とご協力をお願いいたします。

なお、現行計画では、本計画が最終段階（九年目）を迎えた令和四年度に、本計画に関するモニタリング及び評価を主な任務として国文研に設置している日本語歴史的典籍ネットワーク委員会に対し、館長から本計画の事業評価の実施を要請し、令和五年五月に『事業評価書』を取りまとめいただきました。同評価書は本計画のウェブサイトに掲載しておりますので、こちらも併せて是非ご覧ください^{注2}。

注1『大規模学術フロンティア促進事業の「事業移行評価」（報告）「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」から「データ駆動による課題解決型人文学の創成」への事業移行について』

https://www.mext.go.jp/content/20230731-mxt-gakukikan-000031516_1.pdf

注2『事業評価書』

https://www.nijl.ac.jp/pages/cijproject/images/project-appraisal_report.pdf

『事業評価書 関連資料』

https://www.nijl.ac.jp/pages/cijproject/images/related_documents_of_project_appraisal_report.pdf



こんな古典籍があった！～拠点大学等古典籍画像紹介～第12回

専門機関の典籍も紹介しています。

歴史的典籍NW事業では、二〇一五年度から、拠点大学における古典籍の撮影を実施しています。国書データベースで公開された古典籍から、各拠点大学や専門機関おすすめの一点をご紹介します。

●早稲田大学演劇博物館所蔵

富永平兵衛作絵入狂言本『若後家児手柏』
わかごけこのてがしわ

URL: <https://doi.org/10.20730/100427248>

早稲田大学演劇博物館には元禄期から享保期までの絵入狂言本が五十数点所蔵されている。『若後家児手柏』は、最も新しく二〇一六年に当館所蔵となった。無刊記で役人替名付・題簽を逸し年代考証の決め手を欠くが、内題下の狂言作者富永平兵衛の活動が元禄前期に限られ、同時期の狂言本板式との比較から、元禄六年（一六九三）頃刊と推定しうる。富永作狂言本で現存が知られるのは十点のみだが、本作を含め四点が当館に所蔵されている。



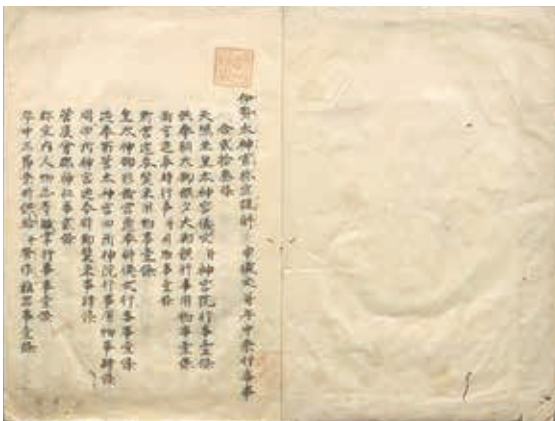
(該当部分を見る:
<https://kokusho.nijl.ac.jp/biblio/100427248/13>)

●皇學館大学研究開発推進センター神道研究所所蔵

伊勢太神宮祓宜謹解申儀式并年中祭行事』
いせだいじんぐうぎつしんていしもうすぎしきならびにねんちゅうまつりぎようじのてい

URL: <https://doi.org/10.20730/100419656>

三重県伊勢市に鎮座する皇大神宮(内宮)の神主(荒木田氏)柳家に伝来した、一五三部三六二冊からなる蔵書。大半は江戸時代後期から明治時代に及び、社家としての柳家最後の当主である柳尚簡が蒐集・書写したものの。全体の三分の一は伊勢の神宮に関わる書籍で、『皇太神宮儀式帳』以下の神書・年中行事書類・荒木田系譜類などがある。和歌関係の版本のほか、国史・伝記・神道関係などの書物も多く見られ、「柳氏蔵書」の蔵書印が捺される。



(該当部分を見る:
<https://kokusho.nijl.ac.jp/biblio/100419656/3>)

※画像の転載や翻刻掲載などを希望される場合は、利用条件のページ(<https://kokusho.nijl.ac.jp/page/usage.html>)を必ず確認ください。

国書データベース提供開始

二〇二三年三月から「新日本古典籍総合データベース」と「日本古典籍総合目録データベース」を統合・発展させた「国書データベース」の提供を開始しました。

国内外の機関や個人が所蔵する古典籍の書誌情報と全冊デジタル画像を無料で公開しています。

(また、七月二十四日に「コーニツキー版 欧州所在日本古典籍総合目録」との統合を行い、書誌データを公開しました。)

<https://kokusho.nijl.ac.jp/>

イベント報告

JADH2023

Japanese Association for Digital Humanities / 日本デジタル・ヒューマニティーズ学会が開催する年次国際大会(JADH)について、国文学研究資料館が会場校となり、JADH2023を開催しました。

<https://jadh2023.nijl.ac.jp/home>

イベント開催予定

■第九回日本語の歴史的典籍国際研究集会
プログラムの詳細情報等は、ホームページに掲載いたします。

「開催日」二〇二三年

十二月四日

(月)

「開催方法」動画配信

<https://www.nijl.ac.jp/pages/cijproject/sympo2023.html>

<https://www.nijl.ac.jp/pages/cijproject/sympo2023.html>



■国際シンポジウム「草双紙研究の近未来」

実践女子大学との共同国際シンポジウム「草双紙研究の近未来 文理融合研究の成果 第二回」を開催いたします。

「開催日」二〇二三年十二月十七日(日)

「会場」実践女子大学渋谷キャンパス

※オンライン開催

報告

信州大学の速水香織教授が、長野県諏訪二葉高等学校において、異分野融合研究「古典籍画像に基づくICT活用教育プログラム」の開発で作成したすぐろく教材を使用した出前授業を行いました。



上智大学国際教養学部及び大学院の留学生向け授業において、当館とCODHが公開している「江戸料理レシピデータセット」の現代版レシピを再現した料理が持ち寄られました。



ふみ 特別号は、

令和6(2024)年

3月発行予定です。

■表題の背景色は菖蒲色(あやめいろ)です。花菖蒲の紫の花の色に似た赤みの紫色をいいます。江戸時代の染色技法の指南書「手鑑模様節用」には「あみかちたるをききやうといふ、赤みかちたるを、あやめと、となふ」とあります。

■本誌「ふみ」各頁の背景は当資料館蔵の『方丈記』(本阿弥光悦流の書体を模刻した嵯峨本)を利用しています。

■表題「ふみ」の書体は、石川島造船所(現IH)創業者の平野富二が明治十二年六月に刊行し当館所蔵の「BOOK OF SPECIMENS」(活版印刷見本帳)を利用しています。

ふみ

「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」ニューズレター第20号

〈発行日〉

令和5(2023)年9月29日

〈編集・発行〉

国文学研究資料館

古典籍共同研究事業センター

〒190-0014

東京都立川市緑町十一三

TEL 050-5533-2988

FAX 042-526-8883

<http://www.nijl.ac.jp/pages/cijproject/>



『武蔵国絵図』

がご覧になれます。
携帯電話又はスマートフォンのアプリ等で、左記のQRコードを読み取りご覧ください。